

孤雲懷奘禪師とその思想

角 田 春 雄

一、人格と行跡

道元禪師を高祖と仰ぎ、瑩山禪師を太祖と讃える中にあつて、奘祖と慕われながらその研究の少いことは、日本曹洞宗史闡明上の盲点であるから、「正法眼蔵光明」・「三祖記」・「伝光録」・「建搨記」・「光明蔵三昧」・「正法眼蔵隨聞記」・及び村上素道氏の綿密な史的研究を主資料とし、其他を副として研究を進めてみる。

道元禪師から瑩山禪師へと開展した日本曹洞の流れは、単なる空白を蔵しての發展でなく、孤雲懷奘禪師の「光明蔵三昧」及び徹通義介禪師を中心とするの日本達磨宗からの転宗学徒のめざましい教会史的發展の基礎づけがあり、一方、詮慧・経豪の各禪師の教学的努力と相俟つて、瑩山禪師以降の一大發展の母胎となつた。

正法眼蔵中・「摩訶般若波羅密」・「有時」・「帰依三

宝」等をはじめ、幾拾の巻に懷奘禪師の識語がありその努力の跡をとどめている。

また永平広録の、「第二」・「第三」・「第四」・「第八」の四巻は直接手を施し、広録全体の完成に力を尽し、「学道用心集」・「正法眼蔵隨聞記」・「教授戒文」の編纂と筆受、永平寺の充実、遺弟の統一、自ら「光明蔵三昧」を著して、確実な数学と斬新な禅風とを「不動の光明蔵三昧」として把握統一して日本曹洞宗七百年伝燈の基礎をかためた。

『伝光録』に、

「然るに、ある時母儀のところにくく、母すなはち命じて曰く、われ汝をして出家せしむるころざし、上綱の位を補して公上のまじはりをなせとおもはず。たと名利の学業をなさず、黒衣の非人にして、背後に笠をかけ、往来たゞかちよりゆけとおもふのみなり。時

に師ききて承諾し、忽に衣をかへて、ふたたび山にのぼらず」

撓季末法の世を達観した慈母の悲願にもとづいて禅師の求めに正師は道元禅師その人であつた。

無常観に徹し、名利を超越した仏陀の正法は、天童如浄禅師の宗風をつぐ道元禅師において心にくいまでに具現されていた。

自己より年少の道元禅師に師事した禅師の謙虚な態度は、真理とその体現者への絶対的帰投であり、そこには正師を信じる者の喜悦と感激があふれていた。

『伝光録』に、

「かくの如く十二時中師命にそむかざるこゝろざし、師父もかがみる。実に師資の心通徹す。しかのみならず、二十年中、師命によりて療病せし時、師顔に向はざること首尾十日なり。……」

その他三十年四十年師をはなれざるおほしといへども師のごとくなる古今未^レ見聞^ニなり」

とあり、

『三祖記』に、

「元日。当山者仏法勝地也。令^ニ法久住^一。是所^レ望也。」

吾^レ從^レ公雖^モ二年少^{ナリト}。必可^ニ短命^{ナル}。公^レ從^レ吾雖^モ二年長^{ナリト}。必可^ニ長寿^{ナル}。我^レ仏法必至^ニ公^一。弘^ニ通來際^ニ。流^ニ轉無窮^{ナルハ}。即公^レ見孫^耳。鎮^ニ三山門^一。」

といる、『伝光録』に、

「尋常^ニに、元和尚、師をもて重くせらる。」

とあつて、自己亡き後の教団の統一者として懐契禅師に全服の信賴をよせた道元禅師と、正法を重じて自己より年少の師である道元禅師に、身心を奉^レして奉仕した懐契禅師とは、

「師資勝強之有徳・永平門下只師獨^レ而耳。」との「三祖記」の文が如実に示している。

『正法眼蔵随聞記』に、

「嘉禎二年臘月除夜、始めて懐契を興聖寺の首座に請ず。即ち小参の次で、始めて秉^レ拈^一を首座に請ふ。これ興聖寺最初の首座なり。……当寺始めて首座を請し、今日初めて秉^レ拈^一を行はしむ。衆の少きを憂ふること莫れ身の初心なるを顧みること莫れ。汾陽は僅に六七人、葉山は十衆に満たざるなり。然あれどもみな仏祖の道を行じき。

これを叢林の盛なるといひき。」

という道元禪師の短い言葉の中にも、首座とよぶこと四度、懷瑛を用いること一度という程無意識の中に禪師を愛し望をかけており、衆の多少ではなく、眞実の道が行ぜられるのが叢林の生命である旨を強調し、禪師を中心とした直弟子に、激揚の時をまちつつ青雲の熱情をこめて仏祖道の実践をうながし、それを共に行じた姿が躍如としている。

『建擗記』は、道元禪師入滅に際して、

「懷瑛和尚は、吐瀉し、半時計り死入たまふ。」

と描写しているが、『八大人覺』の奥書の、

「如今建長七年て卯解制之前日、令義演書記書写二ニ校之。右先師最後御病中之御草也。仰以前所撰假字正法眼藏等皆書改、並新草、具都盧一百卷可撰之云云。

既始草之御此卷当第十二也。此後御病漸漸重増。仍

御草案等事即止也。所以此御草等先師最後之教勅也。

我等不幸而不拜見一百卷之御草、尤所恨也。若奉

恋慕先師之人、必書此卷而可護持此。積尊最後

之教勅、且先師最後之遺教也。懷瑛記之。」

と照合してその誇張でないことが判る。

更に、崇敬、偉敬、敬服等の語を排して、「先師を恋慕し奉る。」の一言は、肉身の情愛以上に高い親しさを表し、「此後御病漸漸重増。」の悲痛な叫びとともに吾人の肺腑をつく。

また、『帰依三宝』奥書に、

「建長七年て卯夏安居日。以先師之御艸本書写畢。

未及中書清書等一定御再治之時有添削歟於今不

可叶其儀仍御草如此云。」

とあつて、多忙と病勝ちな道元禪師の身辺を忍ばせると共に、正法眼藏筆授校訂の苦心の一端をうかがうことが出来る。

藤原道長の末、九条大相国伊通の曾孫として生れた懷瑛禪師は、八歳にして登嶽し、十八歳にして横川の円能法師について落髪し、俱舎・成実・止観・及び大小乗の教学を究め、道元禪師の俗兄にあたる西山上人こと小坂房証空について浄土教の蘊奥に達し、日本禪宗の先駆者とたゞえられる大日能忍の資、仏地上人覺曼について禅要を学び、その精窮ぶりは一きわめだつていた。

道元禪師の許に投じる以前の禪師は、越前国波著寺にあつて、法兄懷鑑師と共に日本達磨宗の中心人物であつ

た。

京都極楽寺を破却されて布教の天地を求める道元禪師にとつて、義价・義準・義演・義存・義運・義尹・懷照・懷義尼等をひきいての帰投は、禪的素養と理解と情熱とをもつた日本達磨宗徒の一団であり、領主波多野義重の帰依と共に、道元禪師の仏法を具体化する上に頗る重大な役割を果した。

しかし、純一無雜・只管打坐の法門と比較する時、律顯密・浄土の教学を兼修すること廿三年の禪師には、最初の中はそれ等を尊重する気持が時々流露していた。

『伝光録』に、

「はじめて対談せし時、兩三日はたゞ師の得処におなじく見性靈知の事を談ず。時に師歡喜して違背せず。

わが得所実なりとおもふていよいよ敬歎をくはふ。

やゝ日数をふるに、元和尙すこぶる異解をあらはす。

時に師おどろきてほこさをあぐるに、師の外に義あり。」

とあり、

『正法眼蔵隨聞記』に、

「しかあれば学人は祇管打坐して他を管することなか

れ。仏祖の道は只坐禪なり。他事に順ずべからず。と
きに焚問て云く、打坐と看読と、ならべて此を学する
に、語録公案等を見るには、百千に一つも聊か心得る
ことも出来るなり。坐禪にはそれほどのことの験しも
なし、然かあれども猶坐禪を好むべきか。」
との問いに対しても、それは仏祖の道に遠ざかる因縁
だと強くいましめ、更に、

「伝へ聞く、故高野の空阿弥陀仏は、本は顯密の碩徳
なりき、遁世の後念仏の門に入て後に真言師ありて、
来つて密宗の法問を問ひけるに、彼人答へて云く、皆
忘れ終りぬ。一字も記憶せずとて答へられざりけるな
り。是をこそ道心の手本となすべけれ。」

といつて、空阿弥陀仏の例を引いて類似の境遇を経た
懷奘禪師等に暗示されたと思われる。

しかし、道元禪師に随侍して以後の禪師は、旧仏教の
殻を脱して、打坐の仏法を体認し、「一毫衆穴ヲ穿ツ」
の因縁によつて印可証明されたが(列祖記・三祖記)

三河国一宮村松源院にある画像の自賛には、

罪業所感醜陋質

人中第一極非人

従来赤脚学^ス唐歩^一

未^下破^{草鞋}一見^中本身^上

永平二代懷奘自贊

とあつて、謙虚な七絶に無限の精進の心意気を示すと共に、悟を表に出す看話禪を主体としない立場を汲むことが出来る。

また、列祖記・三祖記ともに、僧海・詮慧ともに師を教授師におしたとあるから、道元禪師嗣法の弟子はこぞつて懷奘禪師を第一人者と認めていたことが判る。

〔註・雖^モ得^レ法人^多、奘公・僧海・詮慧三輩是法嗣也。〕（三祖記）

『三祖記』の

「遂^ニ継^グ遺^跡。一切不^レ異。一衆帰伏。四衆群集。道価聞高。柔和懷^レ衆。納^レ身節簡。臨^レ衆寛放。於^レ人礼深。於^レ己儀正。」

の記録は、懷奘禪師の人格と力量を余蘊なく伝えてゐる。

更に、永平寺を董し、豊後の永慶寺を開き、その門下に、義价・寂円・義演・義準・仏僧・道荐等の禪師があり、義价禪師の法嗣に太祖大師とたゞえられる瑩山禪師

があり、その門流に廿五哲の神足等が輩出し、法皇派の祖といわれる寒巖義尹禪師とも殊に深い関係があつた。

『伝光録』に、

「夫れ法ををもんずること、師の操行のごとく、徳をひろむること、師の真風のごとくならば、扶桑国中に宗風いたらざるところなく、天下偏く永平の宗風になびかん。」

とあつて、その宗風弘通面の史実を簡明に伝えてゐる。内に三代の争論を采む当時の永平門下にあつて、よく苦難を超えて発展の基礎を固めたのは、実に禪師の人格と力量によることが頌る大であつた。

二、光明藏三昧の思想

孤雲懷奘禪師に「光明藏三昧」のあることは、その思想・信仰を探る上に極めて重要な意義があり、それは禪師の残した唯一の自著であるが、面山禪師の翻刻までは入室者の限られた人にしか知られなかつた為に、これを評する人々もその内容の重要性に比して極めて少い。

『重彫光明藏三昧』の序で密雲禪師は、

「夫^レ光明藏三昧^一書。吾^カ奘祖^一分^ノ白毫光[。]而^テ祖用^レ之^ヲ

以照破焉。後進用之。以返照焉。世尊五時之化教。高祖一代之垂誨。豈有他哉。」

との至言をはき、澆季末世の大光明とまで讃えている。

陸鉞巖師は、『光明藏三昧布鼓』の例言で、

「光明藏三昧。孤雲懷奘禪師之遺身舍利。而以三國字一横拈倒提。与承陽高祖正法眼藏一如焉。但眼藏卷佚浩翰。此止于一編。」

といひ、面山禪師も亦、

『光明藏三昧序』におきて、

「仏言。智慧光明。如日之照。即是般若觀照。所謂照見五蘊皆空是也。宗門稱之回向返照。永祖一代拳化未曾外此。奘祖承之。以說此卷。可謂子順於父也。」

との適評をのべ、

『正法眼藏隨聞記』凡例には、

「奘祖は祖師より二年の年上なり。後に光明藏三昧を述せられしを拜読すれば、顯密の学も祖師に劣るまじ。但仏祖正伝の訣分明ならぬゆへに祖師に依隨せらるるべし。」

とあつて、光明藏三昧は奘祖の「遺身舍利」で正法眼

藏と一如すとし、また宗門の回向返照と同一異称であるといひ、更に『隨聞記凡例』の、

「顯密の学も祖師に劣るまじ。」

の語は、教学的確實さを誇る光明藏三昧の本文と示しあわせて、日本仏教の正統的教学と、天童如浄禪師から道元禪師へと正伝した宋代精神文化の粹ともいふべき単伝の仏法との統一的把握者たる禪師の面目を充分にい得ている。

(A)、顯密の經典と光明藏三昧

教の殊劣、法の浅深を問題とせず、修行の眞実性を貴んだ道元禪師の、只管打坐・純一無雜の仏法の嫡子たる立場からすれば、たゞ教学の深さを誇ることは、龍を画いて点睛を忘れ、或は春の田の蛙の如く念仏を唱える輩と同一である。故に懷奘禪師は、

「正法眼藏中ニ光明ノ卷アリ。今更ニ此一篇ヲ示スコトハ、偏ヘニ仏家ノ面目ハ光明藏三昧ナルコトヲ脱体ナラシメントナリ。コレ久参入室ノ人ノ自行化他ノ潜行密用ナリ。」

といつて、開卷その目的を脱体におき、生きた仏法を仏法として体認し行取する主旨を闡明している。禪師の

主目的が、只管打坐・三昧王三昧の仏正法の体験にあるから、引用する華嚴・大日・法華・梵網の諸經典は、生きて光明藏三昧となり、ことごとく般若の神通光明となり、歩歩光明の運歩となつて、凡聖迷悟一如の自受用三昧が展開する。

この境地に到つて、黑豆を数えるといわれ、文字法師と嘲笑われた教学の徒は、眞実の行の体認者として仏光明藏裡の人となる。

この意味において禪師は、過去における教学に対する努力を道元禪師というたぐいまれなる正師に接して心にくいまでにそれを坐禅の中に生かし得ている。

たゞ道元禪師は、たくみな和語を駆使して經典をなまのまゝ引用する数が比較的少く、独自の表現で哲學的思想を縦横に拈提するのに対して、禪師は、顕密の經典の重要な文句をそのまゝ仮りて、たくみに単坐正伝の仏法へと人々を導入し、理想とする寂照光明の世界へと入らしめる。

かつて道元禪師の「護国正法義」が、大乘の經典によらないと誤解されて、二乗の見解なりとして当時の教界から斥けられた史実からおしても、(註・溪嵐拾葉集)懷

奘禪師の用いた方法は、その時においてたしかに有効であつた。

禪師は、諸仏の本源・衆生の本有・万法の全体である正法眼藏の当体を、光明藏三昧の一語に托して、法・報・應の三身仏も、大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智の四智をはじめすべての經典に説かれた三昧は光明藏三昧を基として生じるとし、

「華嚴經」の、

「燃燈如來大光明。諸吉祥中最無上。彼仏曾來入此殿。是故此處最吉祥。」

「仏身普放三大光明。色相無邊極清淨。如雲充滿一切土。處處稱揚仏功德。光明所照咸歡喜。衆生有苦悉除滅。各々令恭敬起慈心。此是如來自在用。」

同じく「光明覺品九」の、

「光明徧清淨。塵累悉銷滌。不動離二邊。此是如來智。」

の語を用いて、

「遍法界みな仏印となり、尽虚空ことごとく悟となるこのゆゑに諸仏如來をして本地の法樂をまし覺道の莊嚴をあらたにす。」

という「弁道話」における道元禪師の立場を端的に宣揚している。(註光明藏三昧俗弁)

更に「大日経」の

「秘密主云何菩提。謂如実知自心。」

諸法無相。謂虚空相。」

「大乘行發無縁乘心。法無我性。」

「覺自心本不生。」

「超越二劫二瑜祇行。」(註・二劫・煩惱障・所知障)

を引用する。経曲の文句は短い、真言密教の中心を把握して、これ等のすべてを凡聖・真俗の二辺を離れた光明藏三昧裡のものとし、これ等は、只管打坐の無造作の中に現成するとした。

次に、大乘の妙典といわれる「法華経」の、

「爾時仏放白毫相光。照東方万八千世界。靡不周徧。」

同じく「安樂行品」の

「告文殊師利。言。若菩薩訶薩。住忍辱地。柔和善順。而不卒暴。心亦不驚。又復於法無所不行。而觀諸法如実相。亦不行不分別。」

の経文を、これが只管打坐であり、只管経行であり、

大光明に随順して行くのだと説き、更に同品の「偈」の、

「修撰其心。安住不動。如須弥山。観一切法皆無所。有猶如虚空。無有堅固。不生不出。不動不退。常住一相上。是名近处。」

との、無相を相とすれば常住であるとの教旨を、正直捨方便・但説無上道の直示であると説き、更に玲瓏窮子の例を引いて、己見を存する中は、顕密の事理、五家七宗の妙旨を談しても畢竟生滅に帰すると説いている。

また「梵網経」の、

「欲下長苦提苗。光明照世間上。応当静観。察諸法。真実相。不生亦不滅。不常亦不断。不一亦不異。不来亦不去。乃至於学於無学。勿生分別想。」

の句を引用して、光明藏裡への道を端的に示している。以上で禪師の用いた顕密の經典の大要を尽したが、単なる教学的理解だけでは正伝の仏法の独自性がない。無常に徹し、吾我、名利を離れ、発菩提心にはじまつて真実の仏法の体認をなし、歩歩光明の運歩にまで到らねばならない。

「大家恁麼ノ大教ヲ聞クトイヘドモ、見ルトイヘドモ他ノ境界トノミ習学シテ通身脱落セズ。全体ニ參徹セ

ズ。」

といつて、光明の實踐的把握の重要さを力説し、吾成に執して、眞實の仏法の体認を忘れる程の悲みはないといつてゐる。

「吾我ヲ妄執スルモノハ光明ヲ信ゼズシテ、我ト生死ニ浮沈シテ在_ニ此中_一。光明ヲ徹見スルモノハ平等無碍ノ大智現成シテ在_ニ此中_一。」

ともいつて、光明を徹見すれば平等無碍の大智現成底の人となるとした。

要之、広く顯密の諸經典を用いて正伝の仏法の理解を助けながら、究極においては、無常を觀じ、吾我を忘れ大死人の如くに只管打坐して身心脱落の境地にまでいたるべきであり、その境地こそ光明藏三昧そのものであると説いている。

禪師をしてかゝる境地に到らしめたのは、勿論師自身の力量によるとはいえ、道元禪師の偉大な人格の感化力によるものであり、実に道元禪師は、旧仏教中にあつた禪師にその新生命を与えたのであつた。

(B) 浄土教的色彩と末法思想

横川の円能法師に顯密の教学 西山上人こと小坂房証空に浄土教学を学ぶこと久しきに及んだ禪師には、当時の教界を風靡した浄土教の影響がみられ、末法の語も当時の流行に應じて使用した。仏家には正像末の三時をたえずとし、大乘実教には正像末をとくことなしといひ、また春の田の蛙の如しと念仏の徒を否定した道元禪師の純粹な態度よりやゝ時代相応の変化がうかがえる。

「諸仏ノ身心ハ光明ナリ 一切如来ノ国土ハ常寂光ナリ。浄土身心トモニ光明ニアラザルナシ。故ニ八万四千乃至無量ノ光明トイフナリ。」

といつて、浄土教学の片鱗を見せるとともにこれを光明藏三昧に統一した。

また、我執有所得の衆盲に久瓜の印を許す無眼の師の多いのをなげいて、

「マコトニコレ末法トイヒナガラカナシキコトニアラズヤ。」

といつて、当時の流行にしたがつて末法の語を使用した。

更に、巻中に、「信得行取」という語を強調しているのも、行取を表にした道元禪師にまれな「信得」の語が

併用されている。信を主要素とする宗教の立場からみれば意義深く思われる。また、信が浄土教の生命であるから、信の強調は、浄土教からの暗示を受けたのではないかとも思われる。次に、数ある道元禪師の正法表現の語の中で「光明」の語にその統一を求めたことは、その語感が浄土教との親近さをもつ故に当時の浄土思想流行の日本仏教々界と思ひあわせて興味ある課題である。

(C) 戒と光明

参禅問答は戒律を先と為す。といつた榮西禪師。戒律復興をめざして実践した解脱上人貞慶。生涯を不犯に過したと自負する明恵上人高弁。当時の流行たる末世相應戒律破棄の浄土教隆盛の中にあつて、戒律尊重の正統性を主張する人々も亦必死であつた。

これ等の人々の中にあつて道元禪師は、如淨禪師と榮西禪師から共に血脈を受けて洞濟雙聯の血脈を継承し、榮西禪師の扶律の禪法に対して、律を坐禪に撰して、

「坐禪の時いづれの戒かたもたざる。」

「持戒梵行は禪門の規矩なり」

との立場をとつて、戒を独立して説くことは少なかつ

た。その中において、十六条戒を説き、仏々祖々の嫡々相承を説いた「教授戒文」の存するのは極めて重要な意義がある。

「右教授文、むかしたゞ口伝してふでにのこさずといへども、永平和尙あまねく諸人にさづけしゆゑに、契和尙教授としまししとき、はじめて一説をしるして戒の大概をときおきたまへるを、いま慧球姉公に戒法をさづくるときはじめて訓のまゝに仮名にかきてあたふなり。ときに、日本の元享みづのとのい、八月二十八日かきをはりぬ。能登のくに、洞谷山永光寺の開山伝法沙門 紹瑾在判」

の太祖の真蹟によつて、禪師の筆受によつて、重要な「教授戒文」が存することが判り、また、僧海・詮慧の二師が禪師をおして初めての教授師となしたとの史実によつてもその具体化と実践に尽した力は大きかつた事が判る。禪師はまた、

「真ニ是レ諸仏ノ本源乃至諸仏子ノ根本ナリシカノミナラズ、盧遮那仏初発心ヨリ受持シマシマス一戒光明ナリ、ユエニ心地品トイフ。一切ノ名相ヲ離レタリ、コレヲ心地戒光トイフナリ。」

といつて、一戒光明といい、心地戒光といつて、戒即光明藏三昧の立場を説いている。

三、正法眼藏光明の卷と光明藏三昧

光明藏三昧が光明の卷に依順していることは、劈頭の「正法眼藏中ニ光明ノ卷アリ。今更ニ此一篇ヲ示スコトハ、偏ヘニ仏家ノ面目ハ光明藏三昧ナルコトヲ脱体ナラシメントナリ。」

の語で明白であり、その内容においても、

「長沙招賢大師」の、

「尽十方界是沙門眼、尽十方界是沙門家常語、尽十方界是沙門全身、尽十方界是自己光明、尽十方界無一人不_ト是自己_{ナラ}。」

の同一引用語をはじめ、達磨大師・雲門匡真大師・雪峰存禪師等は、両者共に同一人の異語を用いている。

その根本思想である光明についても、

「それよりのち梁武帝の御宇、普通年中にいたりて、初祖みづから西天より南海の広州に幸す。これ正法眼藏正伝の嫡嗣なり、釈迦牟尼仏より二十八世の法孫なり、ちなみに嵩山の少室峰少林寺に掛錫します、

法を二祖太祖禪師に正伝せりし、これ仏祖光明の親會（註・聞解ニ・親シク昔ヨリ断絶セザルナリト云フ意）なり、それよりさきは仏祖の光明を見門せるなかりき、いはんや自己の光明をしれるあらんや。」（正法眼藏光明）

とあつて、仏祖正伝の生命を、仏祖光明の親會なりという巧みな表現を用い、祖師西來の独自の意義を自己の靈性の自覺と相續に見出している。

「光明藏三昧」はこれを敷衍して、
「モシコノ光明藏中ニワツカモ信得行取ノ分アラバ、ナンゾタダ我身一ツノ得脱ノミナランヤ、上報ニ四恩ニ下資ニ三有ニ。山河大地、自身他身ミナ如如ノ光明遍照シテキワマリナカルベシ。」

といい、曹山本寂大師の語を引いて、

「覺性円明無相身。莫_レ於_ニ知見_ニ強疎親_下。念_ハ異_ハ即_チ於_ニ玄体_ニ昧_シ。心_ハ差_ハ不_レ与_レ道_ニ相隣_ニ。情_分ニ_レ法_ニ沈_ニ前境_ニ。識_鑑ニ_レ多端_ニ失_ニ本真_ニ。如_レ是_ハ句中_ニ全_ク晝_セ會_ニ。了_ラ然_ト無_レ事_ト旧_ニ。

時人。コレスナハチ光明藏中ノ直指直説ニシテシカモ、妙修本証ヲ開示シタマフ処ナリ。」

と親切を極め徹底を期している。更に、

「コノ靈光ニマカセテ安住不動ナルヲ只管打坐ノ三昧
王三昧トイフナリ。」

等の語の示すように、その根本精神は全く道元禪師と
同一である。

次に、その相違点をみると、

顕密の經典中特に大日經の引用は光明藏三昧のみであ
り、三祖大師の「信心銘」・永嘉大師の「証道歌」百丈
禪師・臨濟義玄和尚及び趙州・南泉に問ふところの「平
常心是道」の問答等は光明藏三昧にだけある。

また、唐の憲宗皇帝に対して韓退之が、仏舎利の光明
について、仏光は青黄赤白にあらずと答えた如き支那の
故事は光明の巻だけにその例がある。

なお、

「しかあれば明明の光明は百草なり、百草の光明、す
でに根莖枝葉華果光色、いま与奪あらず。」（註・私
記ニ・イマダ与奪アラストハ・百草ヲ奪ツテ光明ニアタヘタ
ルニアラス）とある。

というような難解な哲学的表現は光明藏三昧にはなと
んどない。

結 論

最後に、光明藏三昧を通して禪師の意図するところは
「イタヅラニ国土ノ治乱、供養ノ好悪ヲ談ジ、タダム
ナシクスギユク此身ノ落居イカニト思ヒ定メタル行履
ナシ。モシコノ光明藏中ニワヅカモ信得行取ノ分アラ
バナソゾタダ我身一ツノ得脱ノミナランヤ、上報、四
恩。下資、三有。山河大地、自身他身ミナ如如ノ光
明遍照シテキワマリナカルベシ。」
との大乘仏教の特色たる報恩利他の精神を説き、一卷
の結びとして、

「コノ三昧ハ始メヨリ諸仏果海ノ道場ナリ、ユエニ単
伝ノ仏坐仏行ナリ。スデニ仏子タルモノハ、タダ仏坐
ニ安坐スベシ。地獄坐、餓鬼坐乃至畜生、修羅、人、
天坐、声聞、縁覺坐ニカナラズシモ坐スベカラズ。カ
クノゴトクニ只管打坐シテ光陰莫^レ虚^ク度^ル。コレヲ直心
道場不可思議解脱ノ光明藏三昧トイフナリ。コノ篇ハ
門下入室ノ人ニアラズバ見セシムルコトナカレ。コレ
自行他他ニオイテ、邪僻ノ見アラザラシメジトノ護法
ノ一片心ナリ。

弘安元年戊寅八月二十八日

懷英謹記

の語をにおいて、只管打坐して仏坐に安坐すべきであり

生死事大無常迅速の旨をふくめて時光の惜むべきを説き、道元禪師の自受用三昧の語に対して光明藏三昧の語を使用しているが、その趣意は全く道元禪師の正伝の仏法を誤りなく見孫に伝えようとする護法の赤心から出たものであり、その根本精神も全く同一である。

この文の書かれた弘安元年は、実に八十一才の老齡であり、弘安三年八月二十四日には遷化されているから、この一文こそ、禪師の全生命を打ちこまれたものであり、先人が禪師の「遺身舍利」であるといつたのは至言であり、禪師の全人格はよくこの一篇に表現されている。

光明藏三昧刊行本

面山禪師刊 明和四年丁亥(ひのたい)（懷奘禪師五百回忌）

環溪密雲禪師、白鳥鼎三和尚、仏徳寺肯庵和尚の三者協力刊行

明治十一年戊寅(つちのえとら)（懷奘禪師六百回忌）

他に、曹洞宗全書。禪門曹洞法語全集。永平二祖孤雲懷奘禪師等がある。

孤雲懷奘禪師年表

（註村上氏本及び曹洞宗大年表ニヨル）

建久九年（一一九八）誕生（西行寂）

正治二年（一二〇〇）（道元禪師誕辰）

元久元年（一二〇五）（嶽山ニ登リ円能法師ノ沙弥トナル）

建永元年（一二〇六）（俱舎成実止観ヲ学シ始ム。）

建保二年（一二一四）（道元禪師、榮西禪師ニ参ズ）

建保三年（一二一五）（円能法師ニ就キテ得度ス。）

建保六年（一二一八）（戒壇ニ登ツテ具足戒ヲ受ク。）

承久二年（一二二〇）（コノ頃証空上人ニツク。）

貞応二年（一二二四）（コノ頃多武峰ニ入ル。）

安貞二年（一二二八）（道元禪師ニ建仁寺ニ見ユ。）

文暦元年（一二三四）（興聖寺ニ参ズ。）

嘉禎元年（一二三五）（八月十五日善戒ヲ受ク。）

〳〳二年（一二三六）（入室伝法、首座ヲ行フ。）

〳〳三年（一二三七）（正法眼藏随聞記筆録。）

寛元元年（一二四三）（七月越前ニ入ル。）

建長五年（一二五三）（永平寺晋山、八月道元禪師ニ随ツテ入）

（道元禪師寂ス）

建長六年（一二五四）（義尹禪師に伝戒。）

建長七年（一二五五）（義价禪師入室。）

文永四年（一二六七）（義价ニ永平寺ヲ譲ル。）

建治元年（一二七五）（瑩山禪師ヲ接得ス。）

弘安元年（一二七八）（光明藏三昧ヲ述ス。）

弘安三年（一二八〇）（二月瑩山禪師ニ大戒ヲ授ケ八月二十四）

日示寂